

● 展望 ●

「ハンドブック」CD-ROM版が拓く可来*

辻川茂男**

本会編「腐食・防食ハンドブック」の書籍版を2000年2月末に出版した。その際お約束したCD-ROM版をようやく出版できる見通しがついた。2001年5月の予定である。この機会に、電子出版の特長をうまく生かすことができた場合の明るい未来を会員諸兄とともに描いてみたい。この「未来」は、恩師増子先生の巻頭言「未来、将来、可来」(防食技術, 32, 626 (1983))の「可来」(来るべき未来で、三者のうちでは一番確実性の高いもの)にあたる。

便覧やハンドブックは編集時点までに蓄積された知見をまとめるものであるから、科学技術の進展にともなう、いずれの工業分野でも改訂ごとに厚みを増してゆく本性をもつ。この「厚み」には「重さ」と「価格」とが含まれ、例えば持ち運べる重さや個人の座右における価格などの視点をもつ。従来の書籍版では重さ＝価格がページ数限度を決定し、新しく加えたと同じページ分だけを古いものから割愛せざるを得ないという制約をかかえてきた。しかし、CD-ROM版は、豊富なデータを盛り込み続けても、軽く薄いままで原価への影響も小さい。ただ、「価格」についてはやはり単純なものではない。書籍版の本体価格は37,000円(税別)である。CD-ROM版のそれは正確な見積もりもない現状にもよるが、5万円から1万円までという大きな幅をもっている。CD-ROM版はもっぱら個人の座右に置いて使われるものであるから低価格ほど好ましい。後述の委員会の努力により、この点の実現にも明るい前途が見えてきた。

両者の相違は改訂のしかたとも密接にかかわる。従来のように10年・20年を隔てたおこなう改訂では、100人以上の新世代執筆者により一斉に書き替えられる。これには、「熱力学のようなものまで毎回書き替えねばならないのか」という疑念と、「書き替えられた原稿が旧稿より必ず優れるか」という雑念とを生じる。これとても書籍版の枠内では議論百出の後も結論には至らない。しかし、CD-ROM版の改訂では、

* 材料と環境, 50, 1 (2001)より。

** 本会理事副会長、ハンドブック編集委員長、東京大学大学院工学系研究科

まずその時間間隔が2年、いや1年というように大幅に短縮されるので、全面改訂はもうばかげたこととなる。併せて、「ページ数」は増やせないという制約からも開放されるので、改訂の主眼はもっぱら新しいデータを補充することに移る。このほうが、まちがいなく愉快的作業になるはずである。

現在、ハンドブック CD-ROM 編集委員会は、中島委員長（鹿島）のもと、明石（IHI）、石寺・成宮（丸善）、佐々木（物質研）、田原（金材研）、半田（NTT）、村上（原電）、中原（旭化成）、細谷（三建）および松橋（新菱）の各委員をもって、CD-ROM 化の技術的問題を検討しており、まもなく書籍版編集委員を加えて内容検討にも入る。CD-ROM 第1版は書籍版の CD-ROM 化そのもので精一杯というところなので、かねてのお願いに応じて書籍版の著者から寄せられた 15, 6 件の CD-ROM 版向けの原稿を容れるほかは、最小限の修正・補充をする程度にとどまる。したがって、容量制約が大幅に緩和される CD-ROM 化の特長を本格的に発揮できるのは第2版以降になる。しかし、そのための作業も第1版の発刊直後からはじめなければならない。

来るべき CD-ROM 版では、(1) 材料の基本特性、多様な材料／環境の組み合わせにおける耐食・腐食挙動、(2) 各種産業分野における材料のパフォーマンス、など従来の書籍版がめざしてきた内容をいっそう充実させるとともに、(3) 事例と腐食形態の写真を盛り込み、また「ハンドブックをみてもよくわからない」といわれる初心者役に役立つ「使い方」の画期的な説明もほしい。その他、(4) 例えばさび取り剤一覧のごとき、商品名であっても必要な具体的技術情報、(5) 分析を依頼できる諸機関や相談を持ち込める腐食センターの紹介、などまで加えてよいかと想う。

何よりも期待したいのは次のことである。10年・20年に1回発刊されてきた書籍版は、いわば本会のいくつかの出版物の一つにすぎなかった。毎年改訂されてゆく CD-ROM 版は、より多くの方々からのより豊かな内容によって全会員にいっそう信頼され愛される携帯「書」であるとともに、外へ対しては広く世の中へ最新知見を発信していく本会の窓になろう。春秋の講演大会、シンポジウム・セミナー、「材料と環境」誌などと並んで、CD-ROM 版が本会活動の中核的役割を担ってゆく姿を期待したい。